

第29回 すかがわ国際短編映画祭

中山 秀一

第29回「すかがわ国際短編映画祭」が、去る5月13～14日の土日に向け、例年どおり須賀川市文化センター大ホールで開催された。この映画祭は、毎年5月に、輝くような新緑のもとで開催されるのだが、今年は異常気象なのか、両日も小雨交じりの肌寒いお天気であった。

映画祭は、来年に第30回の大台を迎えるということで、今年の実行委員会の皆さんは、特別な感慨を抱いて映画祭を運営しておられるのを感じた。

この映画祭の由来は、須賀川市の出身者である金山富男氏が、故郷の映像文化に貢献したいとの想いで、地元関係者と協力のもと、1988年に創設したのが始まりである。金山氏は、短編映像を制作する「金山プロダクション」を経営しており、現在ではご子息の金山芳和さんが会社を引き継いで、映画祭の東京実行委員会代表を務められている。



開会宣言をする堀江祐介映画祭実行副委員長



開会の挨拶をする橋本克也 須賀川市長



開会に際してポータン君と共に挨拶をする深谷育子映画祭実行委員長

☆開催地須賀川近辺の近況

2011年3月11日の東北大地震では、当地は内陸なので津波こそなかったが、古い木造の民家などは被害を受け、更地になった区域もある。須賀川には多くの神社仏閣があり、鳥居や灯籠の倒壊、墓石が倒れるなどの被害があったが、ほぼ復旧が進んでいる。

市庁舎は被害のため、各所に分散して業務を行っていたが、昨年に訪れた時には、新庁舎の大きな鉄骨の筐体が出来上がり、急ピッチで作業が進んでいた。今年行ってみたところ、立派な新庁舎が完成して、すでに市民へのサービス業務が行われていた。建物の外周には回廊が設けられて、各部署への入り口を直接結んでいるという斬新なデザインである。

復興という意味で、今回最も驚いたことは、メインストリートの「松明通り」に面する、広大な敷地で、超大型の施設が建設中であることだ。

この施設名は「須賀川市市民交流センター（仮称）」で、愛称が「tette(てって)」に決定！と表示されている。tetteとは、イタリア語でママの「おっばい」という意味だそうで、赤ちゃん連れの家族も、みんな集まって交流して楽しもうという場になるようだ。

3階まで吹き抜けのロビー空間を持つ5階建の大型施設で、公民館の機能から、図書室、展示室、さらに子育て支援機能として一時保育まで備えている。

来年の3月いっぱい竣工し、秋には正式オープンになるということで、メインストリート「松明通り」が賑やかになることを、筆者も期待している。

☆ゲストトーク

この映画祭では、毎回上映作品と共に、その監督または製作者に登壇していただき、



新装なった市庁舎はすでに市民サービスを開始



松明通りに面した大型市民交流センター「てって」は来年末にオープン予定

作品の上映に続いてゲストトークショーを行っている。

今回は、当地須賀川市の出身で、映画「ゴジラ」の制作者として世界的に有名な、円谷英二監督を採り上げた。円谷監督は1970年に没しているため、今回のゲストには、円谷監督の下で仕事をされた中野昭慶・特殊技術監督を招いて、円谷監督との出会いや彼のとなりなどが語られた。なお、トークショーの進行司会はフリーの江口浩氏が担当した。

上映作品は『現代の主演ウルトラQのおやじ』で、TBSがテレビ放送用として制作したドキュメンタリーシリーズ「現代の主演」の中の一冊、1966年6月2日に放送された番組である。

特撮の神様として世界にその名を知られ、広く一般家庭でも有名であった、円谷監督の日常の素顔に密着取材をしている。さらに貴重な特撮現場の映像なども織り込んであり、50年も前のアナログ時代の世界が甦る思いであった。

・中野昭慶 監督の話（要旨）

東宝に入社後、すぐに円谷組に配属され8年以上にわたり円谷監督の下で勉強した。特撮の専用ステージでの監督の印象は、この人はいったい何を考えているのだろう！と思ったことだ。自分の考えを周囲の人た



上映作品『現代の主演ウルトラQのおやし』

ちに伝えられない人だったので、みな師匠の考えをくみ取って行動するという仕事ぶりであった。

今日の上映作品『現代の主演 ウルトラQのおやし』の意味は、ウルトラQの生みの親という意味だが、当時古い付き合いの人たちは、円谷監督をおやしさんと呼んでいた。自分は当時一年生なので、気安く呼ぶことはできなかったが、その後8年間以上にわたり円谷監督と共に過ごしたのは大きな収穫となっている。

あるとき円谷師匠に、強い照明で眼が疲れると訴えたら、それならサングラスを掛けると言われ、以来このようなサングラスを掛けるようになった。

1970年、円谷監督最後の仕事となった大阪万博では、三菱未来館のパビリオンで、大型スクリーンの特撮映像が、動く歩道と連動して変化するという企画で、迫力のある独創的な映像を見せることになった。企画アイデアなど斬新な演出は円谷監督によるものだが、円谷監督は万博のオープンを前にして亡くなったので、このイベントの仕上げについては、残された多くのスタッフたちが担当して完成させた。

☆上映作品の紹介

この国際短編映画祭は、その名が示すように、「短編映画」という一つの大きな括りの中で、極めて広範囲の作品が上映される。ミニドラマ、ドキュメンタリー、伝統工芸、文化遺産の記録など、実写による多彩なジャンルがあり、さらに人形アニメを含むアニメーションが含まれる。そしてさらに外国作品が加わるので、まさに世界の短編映像作品を楽しむことができる映画祭である。

今年は、国内が19作品、海外が12作品、合計31作品が、2日間にわたり、朝の10時から18時まで、かなりの高密度で上映された。なお、海外作品の製作国はアメリカ、アジア、オーストラリア、ヨー



トークショーで円谷英二監督との思い出を語る中野昭慶監督と司会の江口浩氏

ロッパなど広い範囲にわたっている。

筆者はこれらの作品すべてを大ホールで鑑賞したが、総じて海外作品は映像が技術的にもしっかりしており、不安を感じさせない。内容的にも自己満足的ではなく、商業映画としても適応する作品が多かった。

○『West Bank Story ウェストバンク物語』アメリカ 2005年 21分

今回の映画祭では、筆者が特に唸ってしまった作品である。これはアメリカ映画の『ウエストサイドストーリー』の舞台を、パレスチナに置き換えたパロディ映画だ。構成演出などは、そっくり親分の映画を真似ているのだが、舞台が本場のパレスチナでロケしているようで、格別の雰囲気がある。

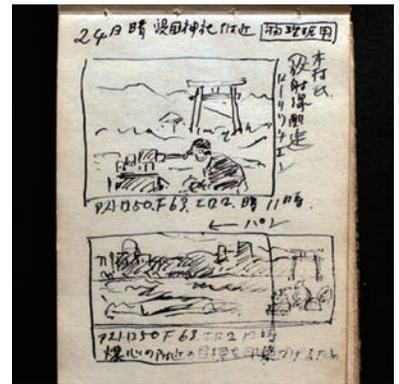
タイトルには「ヨルダン川西岸パレスチナ自治区」とあるが、そこにイスラエル人が経営するレストランと、パレスチナ人が経営する店が隣り合わせて営業している。絶えない両者のいさかきを、歌とダンスで徹底的にしやれのめして笑い飛ばす作品で、ロックミュージカル風の風刺の効いた、和気あいあいのコメディである。

この地域には、イスラエル兵が頻繁に巡回してくるが、その中にハンサムな若い兵隊がいて、パレスチナの店で働く女性が早々に「ならぬ恋」をしてしまう。

当然ながら、娘の家族は大反対するが、「ロミオとジュリエット」のパロディ舞台も用意されており、そこで二人は逢いを重ねる。終盤になり、覚悟を決めた二人は「両教徒が平和に暮らす場所に行こう」、「それはどこ?」「ビバリーヒルズだ」。これでハッピーエンド?、この逃避とも思える身勝手もパロディだろうか。



『ウエストサイドストーリー』のパロディ版『ウエストバンク物語』



『広島原爆 魂の撮影メモ』

○『広島原爆 魂の撮影メモ』(映画カメラマン鈴木喜代治の記した広島) 日本 2017年 29分

広島原爆投下からわずか1か月後、G.H.Q.の監督後援の下に、旧日本学術研究会議原子爆弾被害調査研究特別委員会によって行われた、広島原爆の被害調査記録の作業を、当時の日本映画社が撮影した。その際に、生物・植物の調査のようすを、日映のカメラマンだった鈴木喜代治氏が、26ページに及ぶ克明な撮影メモの記録を残していた。

今回の上映作品は、当時の撮影記録として残された撮影データとスケッチ、その時に撮影された映像をもとに構成した作品である。そのメモには、撮影した場所がスケッチとして残されているので、それをもとに、上映作品では、復興して変貌した現在の街のようすなども加えられている。今は昔となった当時の子供たちの悲惨な映像も編入されており、忘れてはならない原爆の威力を、特別の感慨をもって考えさせる。

撮影データは、レンズの種類と長さ、使用したフィルター等々が克明に書き残され、撮影した画面の絵コンテと、文字による説明なども、手を抜くことなく描かれている。

途中、鈴木カメラマンは急性腎臓炎で、その当時、瓦礫の中に立つ、広島日赤病院に入院して心細い心情も日記に書かれており、思わず胸がいっぱいになる。この日赤病院で撮ったと思われる、ケロイドを負って治療を受ける女性や子供たちの悲惨な姿も映しだされる。

実は、これらの調査資料が映像を含めて、ネガフィルムに至るまで、当時のGHQによりアメリカに接收されていた。しかし今回、それらの接收された資料は、複製を含め、日本政府のもとに引き渡された。今回の上映作品は、その返還された資料をもとに制作された作品が語っている。



『手作り吟醸酒～一人娘～』

因みに、今回の作品を製作監督された能勢広さんは、鈴木喜代治カメラマンのお孫さんで、当映画祭の東京実行委員でもあり、能勢プロダクションの代表を務めて活躍しておられる。

○『手作り吟醸酒～一人娘～』
日本 1984年 23.5分

この映画祭の生みの親である故金山富男氏が撮影と演出を担当しており 63歳の作品だという。氏は無類の日本酒愛好家なので、愛情を込めて撮影しているようですが、スクリーンから感じとることが出来る。

季節職人である「杜氏」のチームが、巧みな分担作業で、徹底的な手作業による、日本酒の仕込みから新酒の出来上がりまでの、複雑な工程を克明に記録している。30年以上前の撮影だが、現在でも大方の酒蔵と呼ばれる伝統的なメーカーは、この作品とそれほど変わらない手作業を続けているようだ。

日本酒造りは、ワインのような単純な工程ではなく、麹菌により米の澱粉を糖化しながら、同時にその糖分を酵母菌の発酵でアルコールに変えるという、世界にも類を見ない複雑な生成工程だと言われる。

映画の中で、うちの酒は限界まで発酵を進めるので、糖分が少なくすっきりした味わいだと言っている。映画祭初日の夜には、地元の関係者たちとの恒例パーティがあるが、今回はこの映画の銘柄「一人娘」が提供され味わうことが出来た。

○『きたかぜとたいよう』
日本 1960年 8分

50年以上も前に、学習研究社が製作した作品。色紙細工による素朴で落ち着いたアニメーションは、児童教育用の作品だと思われる。

表題のように、イソップ童話の「北風と太陽」を、視覚的に優しい素材で表現したアニメーションで、大人が見ても童心に帰



『きたかぜとたいよう』素朴な色紙貼り絵のアニメ



『ニソの杜』自生する神秘的な古木

る思いがする。

○『ニソの杜 (もり)』
日本 2016年 53分

福井県大島半島の先端部に「ニソの杜」と呼ばれる聖地があって、のどかな田んぼと森と山が広がる地域に、ミニチュアのような小さな社が多く点在しており、人々によって代々大切に守られてきた。

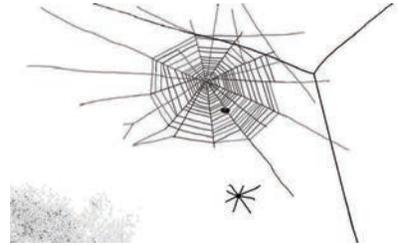
しかし半島の最先端に、大飯原発が建設されると、青戸の大橋という立派な橋が架けられ、人々は農業や漁業を捨てて、原発関連の労働に走り、ニソの杜は荒れ果ててしまう。それを見かねた一人の男が現れて、杜の復活に邁進する様子を記録した作品で、そこには深いメッセージを読み取ることができる。「生活はよくなったが、皆浮かれてしまって、昔の良さはなくなってしまった…」という住民の声が聞かれる。

○『The Gossamer ザ ゴッサマー』
ロシア 2016年

わずか4分05秒の手書き風の線描によるアニメーションだが、発想がいかに大陸ロシア的で、おおらかな、心温まる作品だ。

人のよさそうなロシアおばさんの部屋に、クモが巣を張って、獲物を見張っている。そこへハエが引っかかり、ハエはクモの糸でぐるぐる巻きにされてしまう。部屋ではおばさんがレースの編み物をしている。

それを見たクモ君が大いに好奇心を寄せ、



『ザ ゴッサマー』小さなクモとレース編みをするおばさんとの心の交流が面白く描かれる

糸にぶら下がっておばさんの肩にとまると、おばさんと眼と眼が合って、「こんにちは」のウインクをする。おばさんはビックリ仰天！、電気掃除機を持ち出してクモを吸い取ってしまう。

すると、クモが一本足で吸い取り口から生きて這い出してくる。それを見たおばさんは、ハエ叩きを持って叩こうと手を上げる。すると、なんと！ち切れたクモの足が尺取り虫のように這い出してきた。

それを見たおばさんは、思わず手を止め、「やれ打つなクモが乞うてるもとの足」、救急箱を持ってきて、足を接着剤で付けて包帯を巻いてやる。すっかり足が治ったクモは、おばさんの編むレースに再び関心を持ち、足を直してもらったお礼に？、自分の巣をほどいて糸玉をつくって渡す。

おばさんがその糸で何を編もうかと、図案集を見ていると、クモが、自分で編むと言って、その図案集の複雑な模様のレースを次々に編んで見せる。

おばさんの部屋はクモの糸の美しいレースが、天井からオーロラのように垂れ下がり、おばさんは大満足。糸で巻かれていたハエも、糸を回収するために解かれて、ニコニコ顔で登場するという、まことに楽しいクモとおばさんの心の交流物語りだ。

○『Like a Butterfly ライク ア バタフライ』
イギリス/イタリア 2016年 27分 58秒

役者として成功したいと夢を追う青年が、オーディションを受けながら、チャンスを探ろうとしている。つまらないCMの役とか端役はこなしているが、大きな芽が出てこない。漠然とした将来への不安などが積るばかりで、たばこの量も増えて、ヘビースモーカーとなっている。そして咳を多発



『ライクアバタフライ』往年ハリウッドスターの病室のもとに、スターを夢見る青年が訪ねる



©National Film Board of Canada 『レッドパス』カナダの先住民青年が己の民族意識に目覚める

すようになり、癌ではないかと健康への不安も募ってゆく。

あるとき、自分が役者を目指すきっかけとなった、憧れのハリウッドスターが、年老いて入院している病室を訪ねた。そこで青年は老俳優の豊かな人生経験から発する助言を聞くことで、現在の不安な心に安らぎを覚えるようになり、頻りに病院を訪れる。映画は、その青年の不安に動く心の動きを、アップサイズを多用して見事に心理描写をしている。

○『Red Path レッドパス』 カナダ 2015年 15分 27分

この作品は、カナダのNFB (National Film Board of Canada) 製作だけあって、シネスコサイズの映像もきれいで、内容も実にしっかりした作品だ。

映画は、岸に揚げられたボートが一艘、故郷の静かな湖の岸辺で、カナダケベック州の先住民「アティカメク」の青年が独白するシーンから始まる。

今は故郷で恋人に巡り合えたことに感謝する。自分は、10代のときに煙草を始めて、次に薬をやるようになり、その次には酒に溺れるようになった。母親は自分がお腹にいる時に酒を飲んでいたのだから、自分は未熟児で生まれて入院してから里親に育てられた…。

放浪を続け荒んでいた青年は、漠然とした自覚が芽生えて、生まれ故郷の家族のもとに戻る。故郷とは言っても、先住時代の谷あいの集落ではなく、質素だが一戸建ての住宅が点在するコミュニティで、車が通る道路も整備されており、行政の保護が届いていることが映像から理解できる。

家族は、ちょうど先住民の伝統的な祭りの準備で、鳥の羽をあしらった、祭事用の色鮮やかな帽子や衣装を手作りしている。青年はそれを手伝いながら、自分にも先住民の血が流れていることを自覚して、先住民としてのアイデンティティを取り戻し始めているようだ。最近では故郷に戻る仲間



『セメレ』母と疎遠な娘セメレは、父親の愛情を求めて出稼ぎ先の父を遠路訪ねる

も増えているという。

彼らの祭事イベントが、地元のコミュニティホールで上演されるので、青年は積極的に参加して、本来の自分を取り戻していく姿が描かれる。

酒というものを知らなかった先住民に、酒を与えて取引をしたのは入植者の白人で、彼らが先住民を酒に溺れさせたという話を聞いたことがある。

○『SEMELE セメレ』 キプロス 2015年 13分

これはキプロスの作品である。地中海東端に浮かぶ島がその国で、調べると有史以前から海上交通の要所として、周りの国から影響を受けたようで、筆者には魅力的な先入観がある国だ。この映画で見ると、地中海特有の乾燥した茶色の地面が広がる、ほこりっぽい環境で、裕福な地域ではないようだ。

この映画は、このような背景と環境だからこそ、単純だが感情移入ができるテーマとストーリーだ。

11歳という年頃の少女セメレの父親は、遠く離れた所にある木工製作所の職人として、長期の出稼ぎに出ている。少女が住む家では、母親が別居しているのか、そうでなくても娘との交流がないようだ。このような家庭環境で、娘は父親への思慕が深まる。

あるとき、娘は学校の通知書類に父親のサインが必要なので、ヒッチハイクをして父親の働く木工製作所にたどり着き、父親を呼び出す。

父親は、無精ひげを生やした如何にも職人らしい無口で大きな男だ。久しぶりに訪ねてきた娘と話すのに、タバコを切らして探しまわり、うろたえる有様。娘の差し出す通知書にサインをしてから、娘を連れて外れにある小さな店でサンドイッチを買って、ベンチに二人座って食べる。やがて娘は久しぶりの父親に寄り添って満足そうに眠っている。



『アットホーム イン ザ ワールド』チェチェン紛争の難民マゴメッドは居住権を得て赤十字施設から旅立つ

娘はバスで帰途に就くが、サインをしてもらった通知書を丸めて、走るバスの窓から捨ててしまった。通知書は父親に会うための手段だったのだ。

○『アットホーム イン ザ ワールド』 デンマーク 2015年 58分 30秒

このドキュメンタリーは、デンマークが行っている難民受け入れの手厚い事業を、丁寧に密着取材している。

難民家族の子供たちは、先ず赤十字学校に入学して、デンマーク語の読み書きを教わる。やがてこの学校施設を卒業して、新たな居住地の学校に入っても、すぐに馴染めるよう、基礎的な支援をしている。この先生たちは、勉強だけではなく、子どもたちの生活指導まで、熱心に行っている。

映画は、チェチェン紛争で、家族と共に逃れてきた子供マゴメッド君を中心に、難民家族の子供たちを描いている。ほかに、ジェームス君は、シリアから家族と共に亡命した。またアリ君は、アフガニスタンからの亡命だが、ここに落ち着くまでは、イラン、トルコ、イタリア、フランス、ノルウェイ、等々を漂流してきたという。

子どもたちは、辛い過去を背負っており、そのため無口な性格になった子や、過去を感じさせないだらかな子供など様々だ。

この映画の主演マゴメッドは、チェチェンでロシア人が家の中に押し入ってきて、それ以来臆病な性格になった。更に父親が運動家だとレッテルを押されたので、難民の認定が危うい。しかし、やっと父親の難民が認められ、新たな住居に移るため、この赤十字の学校から巣立つことになった。

この映画を観ると、デンマークの難民受け入れ対策が、いかにきめ細かく行き届いているかが分る。デンマークという国の豊かさを感じた次第だ。

Syuichi Nakayama
日本映画テレビ技術協会名誉会員